

# “農と食” 北の大地から

連載第8回

## 「定年帰農」の可能性

職場での現役生活を終えたのち、農村地帯に移り住んで「農的暮らし」をめざす人たちが少しずつ増えている。豊富な人生経験を活かしつつ、野菜や果樹の栽培、小動物の飼育などに取りくんでいる道央圏の三つの事例を紹介しながら、ここ北海道での「定年帰農」の可能性や課題を考える。

### 3年かけ農地取得 教員経験も生きる

後志管内仁木町の中園穂、昌子さん夫婦が営む「ヘルシー果樹園」は、北海道を望む丘陵地帯の一角にある。雪解けの季節を前にして、リンゴの葉が生い茂るようすを想像しながら剪定したり、春先に出産するヤギの乳搾りをどうしたらいいか…などと思いをめぐらせる。馬も二頭飼い、地力を高めるために馬糞の堆肥を入れて、化学肥料はできるだけ使わない。「経営収支はトントン。プラスチックは健康と生きがいですよ(穂さん)と、田舎暮らしをこよなく楽しんでいる。

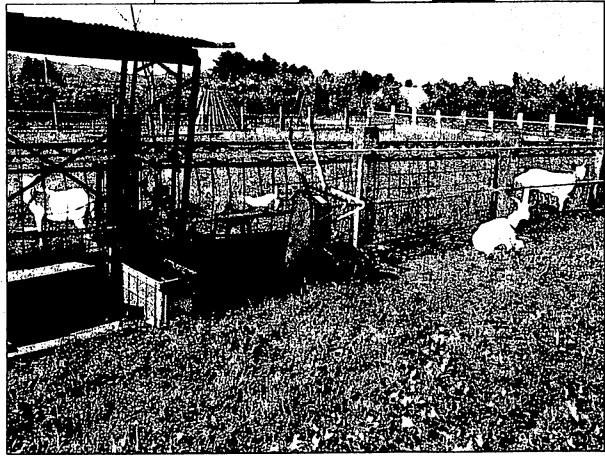
九州出身の穂さん(1937年生まれ)は酪農学園大学を卒業後、雑誌記者をへて、山梨県内の農村研修施設や道内の農業高校などで三十年ほど教員生活を送った。最後に赴任した余市高(81・97年)で初めて園芸を担当したが、学校の農場だけではのり不足、八五年、この地に新規入植した。といっても、そう簡単に現職教員が農地を入手できるわけではない。まして、新規入植する人がまだ少なかった時代だ。知己の農協役員などの協力を得て三年がかりで折衝し、昌子さん(1943年生まれ)が経営主になり五ヘクタールほどの土地を取得できた。景色は抜群だが、石が多いうえに重

# 豊富な人生経験を活かして 「農的暮らし」を楽しむ人たち



ルポライター  
滝川 康治

18年前に農地を取得し、果樹園をやりながら動物を飼う仁木町の中園穂昌子さんと、5頭いるヤギを増やして乳を搾り、チーズを造ることが夢という(写真左)



粘土、長いあいだ放置であった土地だった。休耕田の一部を三年がかりで整備するなど、畑にするのに苦労した。駆け出し教員時代に農業機械を担当したこともあり、機械類の修理や整備はお手の物。定年退職後、自賄いでコツコツやるのが楽しみで、自分たちの支えになった、という。

農場は、草地にしている休耕田が一ニヘクタール、ワイン用のブドウやサクランボ、リンゴ、ブルーベリーを栽培する果樹園が六十五アール、野菜などの畑が三十六アールあり、残り三ヘクタール弱が山林原野である。ヤギを

五頭飼っており、これを増やして自家用チーズをつくるのが目下の夢。果樹園にヤギを放して下草を食べさせる「立体農業」をめざしている。

### 農産物は直売主体 田舎暮らしに感謝

畑の大豆をミソにしたり、小豆は餡に、イチゴはジャムに加工する。自家製ワインやリンゴジュースもつくった。

農産物は、農協にブドウを出荷する以外、直売や市場にまわる。

昌子さんは、近隣の町で無農薬栽培などに携わる新規就農者グループ「百姓クラブ」の会員で、昨年は小樽の都通商店街で行なった直売会に初めて参加した。赤井川村内の体験観光施設「ホビの丘」でも直売をやっている。「都通りでは野菜に虫がついていても『安全です』とPRしています。自分が

育てた物を売るのって面白い。やみつきになっちゃいます(昌子さん)

穂さんは糖尿病の治療歴が十年にわたるが、作業に汗を流すことで健康を保ってきた。定年帰農の効用をこう語る。「丘に上って日本海を見つめ、速くを見ながら物思いにふける——緑はストレスを取り除いてくれるし、町の生活にない豊かさを与えてくれる。心も体もバランスが取れた状態で、田舎暮らしには人間本来の姿があります。(退職前は)組織のなかで働いてきたけれど、ここでは畑や小屋づくり、家畜の飼育…と自分の発想で納得した作業ができる。物事を成し遂げたときの感動が得られることを、定年帰農のなかで一番感謝していますね」

わたしは高校時代、新米教師 中園さんの教え子の一人だった。農業高校といえども、当時の恩師のなかで定年帰農の道を選んだ人は数少ない。土裏さを失わない元教員は、とても貴重な存在だと思う。

### 54歳の時に脱サラ 自給自足の夢実現

「定年後は広い土地を買って土いじり



田中農場の有精卵は、近くの新興住宅地などのお客さんに販売する

に知り合った人々たちとのつながりだ。転勤先の知人や学生時代の友人ら支援会員が九十人ほどいて、農産物を直販する。さらに、道内には五十家族ほどの友人があり、農場を訪れて楽しみながら買ってくれる。当別町のスウェーデンヒルズにはファンが多く、冬場は卵を購入してもらう。

まさに「顔の見える関係」を地でいく農業である。鶏の世話とハーブ栽培を担当する民世さんは、「この生活に満足していますよ」と話す。

農場のモットーは次の三つだという。

①家族と仲間のために安全と味を追求する

②新しい農業の方法を積極的に取り入れる

③体力が落ちてもできる農業の模索

「収益を上げる点では落着生（農業で生活費を助けるまでいかないので、とあえずそのレベルまでいきたいね）と笑顔を見せる勝吉さん。そして、「ゆくゆくは化学肥料を使わずに自己流の自然農法をやりたい。安全は当たり前、そのうえで美味しくてきれいなものを作ること。うまくいけば『連つた売り方があるよ』と伝えられるし、村の人がそれを真似ることで何か貢献できるかもしれません」と意欲たっぷりである。今年も、古い納屋を改造してトイレや休憩スペースを造り、冬にも知人を招いて一緒に楽しめるようにする予定。研究熱心で積極的な田中さん夫婦だけに、五年後、十年後の展開が楽しみだ。

札幌市南区の新興住宅地の一角で自給菜園を作り、鶏も飼育する志羅山繁さん（1939年生まれ）は昨年、仁木町内に果樹園一・五ヘクタールを取得した。ゆくゆくは家族で同町に定住し、この果樹園に鶏などを放し飼いたい、と夢を膨らませる。

岩手出身の志羅山さんは、十八歳で渡道し、五十八歳で現役を退くまで、建設畑を中心にさまざまな仕事を経験した。八年ほど前に現在地に移り住み、百坪ほどの菜園をつくる。野菜づくりに堆肥が欲しいし、卵や肉も食べられる——と、すぐに鶏を飼った。

いまは、烏骨鶏や卵肉兼用種の「ネラ」を七十羽ほど飼い、生産された野菜や卵は、妻の郁子さんが営む喫茶店「香聴庵」の食材になっている。今年ほど前、自宅に併設して開業。この喫茶店で働く娘の美香さんは、有機農業に関心が深く、家族そろって田舎暮らしを志向してきた。

「定年後を余生」というけれど、人間は余った物で生活すればいい」が志羅山さんの持論だ。「配合飼料は信用ならん」と、カット節のだし殻やくず野菜、残飯、くず小麦などを集めて鶏に与えるので、購入飼料は魚粉とカキ殻くらい、とか。だから、もつと広い土

地で鶏を飼うことが定年後の夢だった。果樹園の購入で夢の実現へ踏み出した。昨年は友人たちに呼びかけて果物を収穫。しばらくは札幌と仁木を行き来する「二足の草鞋」の生活で、今年も納屋を改造して夏のあいだ寝泊まりできるようにしたい、と張り切る。

「身土不二」という言葉があるように、生き物が一体となって自然をつくりだしている。北海道にいながら、広島のカキやオーストラリアのアスパラを食べながら病気になったりする。人間の体

昨年、果樹園を取得して、札幌と仁木を行き来している志羅山繁さん



たわわに実った「ヘルシー果樹園」のブドウ

志して土地を探していた、その普及員が把握していた物件の一つが、石狩の現在地だった。札幌から近く土地が平坦、中古住宅もついている——好条件がそろっていた。本州の感覚では土地も安い。すぐに移住を決断する。

同年夏には、その住宅を借りて農業研修を始めた。元の地主、寺内崇さんの計らいで町内会などの集まりにも顔を出した。とんとん拍子で事が運び、翌二〇〇〇年には「土いじり」ならぬ

本物の農家に認定される。なんとも幸運な話である。

就農時の投資は、土地代（住宅や納屋を含む）が千四百万円、それに農機具の購入と倉庫の建設費で一千万円だった。勝吉さんは「退職金では足りない金額でしたが、新規就農には一千万円くらいは必要と考えたほうがいい。ラッキーなのは住宅がついていたことですね」と振り返る。

石狩市では、田中さんの入植をきっかけに市と農協が農業総合支援センターをつくり、新規就農を応援してきた。その後も入植者が相次いでおり、すべてここ高岡地区での就農だという。

無農薬の野菜を 知人らに対面販売

面積二ヘクタールの田中農場には、トマトやイチゴ、ナスとピーマン、軟弱野菜、農協から受託した試験栽培用——と、百坪ハウスが五棟あり、雌雄あわせて百羽ほどの鶏も飼っている。畑のほうは、バレイシヨヤトワモロコシ、アスパラ、カボチャのほか、あらゆる野菜を栽培する。

無農薬ということもあって、収量は周囲の農家の半分程度。少量多品目栽培、そして全量を対面販売でさばく。ここで強みを発揮するのが、これまで

をしよう」と思い描いてきた夢が、脱サラして農業を営む形で実現したのは、石狩市高岡の田中勝吉・民世さん夫婦である。三年前、同市の新規就農第一号に認定され、無農薬で多品目の野菜を作る一方、知人らとのつながりを大事にした農業を楽しんでいる。

名古屋のサラリーマン家庭に育った田中勝吉さん（1945年生まれ）は、大学卒業後の三十二年間、新建材関係の会社に勤めてきた。九七年、住友林業の北海道支店（札幌）に転勤になったことで転機が訪れる。前任地は茨城県

同社の出向先で専務の職にあった。が、五十歳を過ぎてあらためて組織に入ることがつまらなく感じ、定年になる前に退職する道を選ぶ。

民世さん（1949年生まれ）との将来設計では、「晴耕雨読での自給生活」が長年の夢。九九年春に退職を申し入れたが、当時はまだ農家をやるうとは考えていなかった。

そんなとき、書店で手にした冊子で（北海道農業担い手センターの存在を知り、早速訪ねてみると、一人の農業改良普及員を紹介された。定年帰農を



無農薬で多品目の野菜を作る石狩市の田中勝吉・民世さん夫婦。冬のハウスでレタスも育てている。

はあらゆる土地の食品や環境についていけないんだよ」

と繁さんが力説すると、郁子さんが、「美味しいものを作って孫や子に食べさせ、自分の食べ物と少し余分があればいい。適当な労働は医療費を抑制するし、健康な生活が送れて、それが国民のためにもなるんじゃないか。仁木の農場で草むしりをしたり、果物を取獲したい人は大歓迎。きてください」と言って声を弾ませた。

ゆくゆくはヤギを飼ってチーズを造り、鶏や羊、豚も放して自給自足に近い生活をしたい——と夢を描く志羅山さん一家。農場は「さいゆうき」と命名し、「西遊喜札幌の西で遊び喜ぶ・再勇氣菜有機」という三つの意味を込めている。

## 志あらば道は開く 多様な就農に希望

これまで紹介した定年帰農の人たちと共に連帯するのは、田舎暮らしを楽しまつて、これまで培ってきたさまざまな人脈を活かして販路を開拓していることだ。農村出身の志羅山さん、農業教育畑が長かった中園さんは帰農しやす

い経験の持ち主だが、田中さん夫婦のように周囲に恵まれて農的人生を実現させた人もいる。志があれば新しい道が開ける、というお手本だろう。いずれも、農業関係者ら周囲の人たちに大きな刺激を与えている。

とはいえ、農作業には肉体力労働がつきまとうし、まとまった資金も必要だ。実際に就農するために、どんな心構えが必要なのか——意見を聞いてみた。

「定年退職後の就農は肉体的にもきびしいので、退職前から準備してやるほうがいい。それに、農業に対する根柢からのこだわりがないとうまくいきません。わたしは動物好きですが、逆に自由にならないし、制約を受ける面もある。でも最近、ヤギの鳴き方が少しずつ分かってきて、彼らの草丈でそれなりの対話ができる。(定年帰農を志す人は)頭のなかで夢を抱くけれど、感性豊かな人でないと田舎暮らしが退屈になって満足できないでしょう。自然体で無理せず、自分の足元を固めながらやる」といい「中園さん」

「基本的に借金はできないという前提で、農業収入に頼らず生活できるペー

やっつけているように思っても、実際には周囲の人の助けが必要なので、村のなかに溶け込める場所を探す——この二つがあれば、ある程度いける。(就農に対する)夫婦間のコンセンサスは最低限の条件。計画どおりにはなりません。自分なりに農業のやり方を描いておくことも大事です。それと、農地や建物を購入せずに、できるだけ借りて営農する方法もよく検討する」といい年をとってから無理な計画を立てないことですよ「田中さん」

不況の影響もあって北海道内では新規就農を志す若手の人たちが増えていますが、本州とは違って、定年帰農の道を選ぶ人はまだまだ少ない。これまでは「二ヘクター以上」という農地の取得条件が、新たに農業を始めるときの障害になってきた面もある。

が、一部地域ではこれを「二十アール以上」に緩和しようとする模索も始まっている。より少ない面積で、気軽に土や動物たちとふれあい、多様な「農の営み」を創っていくことは明日の北海道農業への希望にもなる。定年帰農に取り組みやすいシステムづくりも必要ではないだろうか。